

平成 21 年 6 月 1 日現在

研究種目：若手研究(B)
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19730401
 研究課題名（和文）軽度発達障害児の理解語彙の評価と支援方法の開発
 研究課題名（英文）Assessment of comprehensive vocabulary and development of teaching method for children with mild developmental disabilities
 研究代表者
 名越斉子（NAGOSHI NAOKO）
 埼玉大学・教育学部・准教授
 研究者番号：30436331

研究成果の概要： PVT-R 絵画語い発達検査は理解語彙力を測定する検査であるが、知能や学力との関連が強く、検査中の行動が支援や判断の裏付けとなることが示された。事例研究では、子どもの特性を理解し、学習や生活全般への支援方法を考える上で PVT-R が役立つことを明らかにした。簡便さとそれゆえの限界を熟知すれば、小学校に在籍する発達障害など配慮を要する子どものための初期アセスメントとして PVT-R は有用である。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	600,000	0	600,000
2008 年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,000,000	120,000	1,120,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・特別支援教育

キーワード：発達障害、アセスメント、理解語彙

1. 研究開始当初の背景

(1) 実用的なアセスメントの必要性

LD、ADHD、高機能自閉症等の軽度発達障害に類した症状のある児童生徒は通常学級の6%を超え、校内支援体制の確立が緊急課題の一つである。個々の児童生徒の認知能力の特性に着目した支援が有効とされるが、WISC-III等の精査は学校教員には実施が難しく、専門機関に繋げるにも時間を要する。精査に至るまでの間、担任らが具体的な指導指針を得られるような簡便かつ信頼性の高い、実用的なアセスメントが不可欠である。

(2) PVT-R 絵画語い発達検査(以下 PVT-R)

への着目理由

- ・言葉は教育上もっとも多く用いられる支援の一つであり、初期アセスメントとして言語能力を測定する意義が高い。
- ・PVT-R は実施が短時間・簡便であり、学校現場で使いやすいと思われる。
- ・改訂前の PVT は理解語彙を測定する検査として臨床的有用性が認められている。
- ・PVT-R の完成・発行が間近に迫っている。
- ・発達障害児は認知発達の特異性から理解語彙にもアンバランスが生じていると予想され、理解語彙の相当年齢だけでなく、そのアンバランスさに配慮すべきだと考えられる。
- ・筆者自身が PVT-R 作成に携わっており、健常児データの利用が可能である。

2. 研究の目的

(1) 軽度発達障害児の理解語彙の特性の研究

PVT-R を軽度発達障害 (LD、ADHD、高機能自閉症、境界域知能、軽度知的障害) のある児童に適用し、障害種や認知能力タイプ別毎の語彙理解における特性を明らかにすることを第1の目的とした。

(2) 軽度発達障害児への支援指針の作成

(1) を踏まえ、発達特性に応じた支援の指針を示した「PVT-R の活用マニュアル」を作成することを第2の目的とした。

3. 研究の方法

(1) 軽度発達障害児の理解語彙の特性の研究 (2007 年度)

①軽度発達障害データの収集

2007 年 9～翌年 1 月、首都圏の 7 専門機関に協力を依頼し、通常学級に在籍する軽度発達障害のある小学生 89 名分の PVT-R 結果と基礎情報を得た。そのうち欠損値のない 78 名のデータを分析に用いた。

②高機能自閉症児の理解語彙の発達の分析

高機能自閉症の診断・判断を受け、LD や ADHD の症状が顕著に見られる事例を除いた 8～10 歳の 27 名 (平均 FIQ100.70 (SD18.18)) を高機能自閉症児群とし、語彙の正答率の推移パターンを健常児群と比較・分析した。健常児群は年齢をマッチさせた PVT-R 標準化データ (422 名) を使用した (PVT-R 共著者より使用の承諾を得た)。

③高機能自閉症児における PVT-R と WISC-III および学習困難の関連の分析

高機能自閉症の診断・判断を受けた 51 名の PVT-R 評価点 (平均 9.86 (SD4.16)) と WISC-III の IQ (平均 FIQ100.41 (SD17.74)) や群指数、学力困難得点との相関係数を算出し、PVT-R で測定している理解語彙と知能や学習困難の関連を分析した。

④軽度発達障害児の検査時行動特性の分析

PVT-R 実施時の行動観察チェック項目に該当した行動の頻度を得点化し、障害種との関連を分析した。また検査者による自由記述との関連についても同様に分析した。

(2) 軽度発達障害児への支援指針の作成 (2008 年度)

S 県内の 3 つの公立小学校に協力を依頼し、軽度発達障害ならびにその疑いのある児童 8 名に PVT-R を実施し、(1) の結果も踏まえ

ながら各児童の担任ならびに保護者に半年間のコンサルテーションを実施した。コンサルテーションは一人当たり 2～3 回であった。担任らへのアンケート調査と授業時の観察結果をもとに①PVT-R は学校で活用しやすいか、②PVT-R は担任や保護者が対象児を理解する上で役立つか、③PVT-R から示唆される支援方法は有効か、を分析した。そして、「PVT-R 活用マニュアル」を含む研究報告書を作成した。

4. 研究成果

(1) 軽度発達障害児の理解語彙の特性

①軽度発達障害児データの概要

LD、ADHD、自閉症様の症状の有無や程度を相談・指導担当者に尋ね、それぞれの症状が「ややある」「はっきりある」と回答した人数を調べたところ、判断・診断名にあたる主たる障害以外の障害症状がないのは、78 名中 20 名 (25.6%) にすぎず、70%以上が別の判断・診断名以外の障害特性を併せ持っていた。この数値は、学校や相談の現場の実態よく適合していると感じる。学級担任や保護者は判断・診断に沿って対応しようとするが、それだけでは対応しきれず、それ以外の特性を考慮しなければ効果が上がらない事例が少なくないということである。判断・診断名のみで囚われることなく、その子どもの全体像を捉えて適切な支援を行うことの必要性の再認識を促すデータといえよう。

②高機能自閉症児の理解語彙の発達の分析

高機能自閉症児群の評価点平均は健常児群より有意に高く、理解語彙の力が高いことを示した。自閉症児は単語レベルの獲得は良好であるという先行研究に合致する結果であった。しかし検査の課題提示におけるモデルティや回答方法の違いによって異なる結果が出る可能性を示唆した報告もあるため、今後検証していく必要がある。また、事例数の制約から自閉症以外の特性が「はっきりある」事例は除外したが、「ややある」事例は含めて分析を行った。より純粋な高機能自閉症の事例を蓄積していく必要があるだろう。

健常児の語彙の正答率は年齢とともに上昇する。しかし高機能自閉症児の場合、異なる推移を示す語彙が散見された (図 1, 2、黒実線が高機能自閉症、赤点線が健常児)。言葉は人との相互作用を通じて獲得されるものだが、社会性やコミュニケーションの困難や興味の顕著な偏りを中核症状に持つ自閉症児の場合、語彙の獲得手段や経過が異なり、語彙の量的・質的発達に特異性が生じることが考えられる。しかし、自閉症児の言語発達に関する研究はまだ途上であり、どのような発達経過を辿るかについては解明されていない

ない。今回は24語彙、事例27名とサンプルが限られていたため、今後は語彙と事例の双方を拡充し、基礎データを蓄積することが課題である。

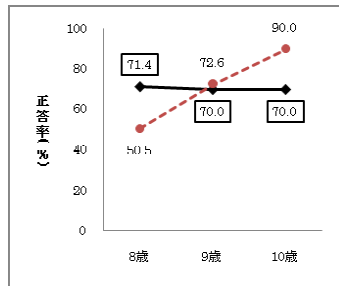


図1 「価格」の正答率推移

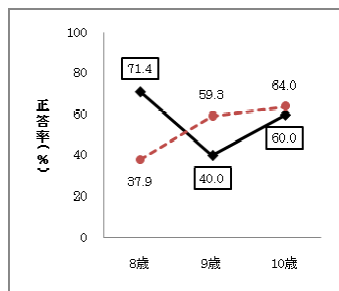


図2 「製造」の正答率推移

③高機能自閉症児におけるPVT-RとWISC-IIIおよび学習困難の関連の分析

PVT-Rが測定しているのは言語領域の一部(単語の音韻的、意味的理解)であり、PVT-Rの本来の目的は、子どもの理解語彙の力を把握し、日常的な指示や言語説明の出し方を工夫することにある。しかし、発達障害児のPVT-RとWISC-IIIのVIQ($r=.717, p<.01$)やFIQ($r=.593, p<.01$)の相関の高さを踏まえると、PVT-Rの結果から全般的知的発達レベルや全般的な言語能力について見当をつけることが可能であると考えられる。つまり、指示や説明だけでなく、様々な学習目標や課題のレベルを考える際にもPVT-Rの結果を役立てることができるだろう。

また、WISC-IIIの下位検査との相関関係からは、PVT-Rの測定している能力や機能について示唆が得られた。これらの示唆はPVT-Rを単独、あるいは検査バッテリーの一つとして用いるときの解釈に生かされ、子どもの特性を理解する一助になるであろう。しかし、本研究で示されたのはあくまでも相関関係であり、動作性能力も測定していないため、PVT-Rの結果とIQや言語能力全般を同一視することはできない。PVT-Rの結果を参考に支援を行いながら、より精緻で多側面についての評価を行っていくことが望まれる。例えば、WISC-IIIで言語能力や動作性能力、全般的知的能力を評価したり、K-ABCやDN-CASなどで情報処理力を見たりすることも必要だろう。

他の心理検査との関連を見ることで、PVT-Rが測る能力や機能がより明らかになっていくものと思われる。

PVT-Rの評価点と学習困難総得点との相関は $-0.502 (p<.01)$ であり、PVT-Rが低得点であるほど、学習困難が大きいという関係性が認められた。従って、PVT-Rで低得点が出た場合、学習の遅れも伴っているか、今後遅れが出やすいことを念頭に置き、学習の習得状況を丁寧に把握し、必要に応じてより個別的な支援を増やすが必要になるだろう。ただし、PVT-Rの測定範囲は狭いのでWISC-IIIなどの精査で、学習困難のメカニズムを明らかにし、適した支援を行うことが肝要である。学習困難には、障害固有の特性や知的能力レベル、合併する他の障害、環境要因など様々な要因が影響すると考えられる。障害種やIQ値を統制しながら整理することが望まれる

④軽度発達障害児の検査時の行動特性や検査者の働きかけとの関連の分析

行動特性間の相関関係から、気が散りやすい子ども、動きが多い子ども、衝動的な反応を示す子どもには、検査者は、注意を喚起するような働きかけをより多く行う傾向が認められた。また、評価を気にする子どもや気が散りやすい子どもには、励ましや賞賛を多く行っている様子もわかった。

また、気が散りやすい子どもへの注意喚起は効果的であり、積極的にそうした支援を行うことが有効であると思われる。しかし、評価に敏感な子どもに対する励ましや賞賛の効果には個人差があることがうかがえた。自信のない子どもの場合、励ましや賞賛がかえってプレッシャーになるのかもしれない。発達障害の支援では、小さな努力や進歩も見逃さずに「褒める、賞賛する」ことが推奨される。しかしながら、褒めるといっても子どもの年齢や心理状態、周囲に友達がいるかどうかなど、様々なことに配慮した褒め方がある。本人が受け容れやすく、効果のある励まし方や賞賛の仕方を考える必要があるだろう。

これらの結果から、PVT-Rの評価点や語彙年齢だけでなく、検査中の特性や働きかけへの反応性などの行動観察による質的情報も踏まえることで、子どもの実態把握と日常の支援をよりよいものにするのが可能になると考えられる。

行動観察票の項目と障害種との関連性は弱かったが、検査者の自由記述による記録では、それぞれの障害に特徴的な様子が挙げられており、検査中の子どもの様子を観察することは、適切な判断や支援の一助になると考えられる。検査者の経験や力量によって差が生じないように、観察の観点を示すことが必要であり、行動観察票の見直しを検討したい。

(2) 軽度発達障害児への支援指針

PVT-Rを用いたコンサルテーションの対象児8事例中3事例は、担任のコンサルテーションニーズがもともと低かったこと、行動観察児に欠席であったことなどから、途中でコンサルテーションを中断したため、5事例の分析を中心に進めた。

①PVT-Rは学校で活用しやすいか

本研究では、本人や担任の意向で授業中の抽出で検査を実施した事例もいたが、昼休みや休み時間等の授業に影響を及ぼさない時間帯での実施が可能であった。授業中ではないので、学習に不利が生じたり、他の子どもの目を気にしたりせずに検査を受けることができ、物理的・心理的な負担が小さかったと思われる。このことは保護者から実施への賛同を得られやすかった理由の一つである。また従来就学指導に利用されてきた知能検査とは違うこと、測定範囲の狭さゆえに障害が露呈しにくいことは、保護者の不安の軽減に繋がるという示唆も得られた。これらの結果は、PVT-Rの学校における利用可能性の高さを示唆している。

②PVT-Rは担任や保護者が対象児を理解する上で役立つか

PVT-Rの語彙年齢、検査中の様子、普段の様子との関連に関する説明が、対象児を理解する上で役立ったと担任から回答を得た。担任は毎日対象児を同年齢集団の中で見ており、平均より低い・高いといったおおよその発達レベルについては把握していたはずである。PVT-Rによって、漠然とした印象の裏付けが得られ、自信を持って子どもの支援や保護者への対応に当たることができたと思われる。ただし、語彙年齢等の数値だけでなく、検査中の様子やそれらと日常のつまずきの関連についての説明があったことで、よりイメージしやすくなったものと考えられる。

③PVT-Rから示唆される支援方法は有効か

5事例に対して提案した支援方法の実践率は62.5~100% (平均90.3%)であった。また、実践率88%以上の4事例については全ての実践方法に対して「効果あり」という評価を得たが、最低実践率(62.5%)の1事例は「効果なし」という評価も含まれていた。支援方法の効果を左右する要因として、各事例の在籍している学級の状況(他に支援を要する児童の有無や人数)、担任の精神的・時間的余裕等が考えられた。また、コンサルテーション開始時には保護者の抵抗感が強く、精査や専門機関への受診に繋がっていなかった4事例は、コンサルテーション終了時までに精査や専門機関予約に至った。担任らの誠意ある関わりによる部分は大きいですが、PVT-R

を用いたコンサルテーションを通じて、検査や相談が有益であると保護者に実感されたことも影響したと思われる。

以上の量的データ分析とコンサルテーション事例研究を踏まえ、PVT-R活用マニュアルを作成した。主な内容は以下の通りである。

PVT-R活用マニュアル(概要)

●PVT-Rの特徴

- ・言語検査の一つであり、単語を聞いて理解する力を測定する
- ・子どもは言葉での応答が求められず、指さして答えればよい
- ・10~15分程度の短時間で実施できる
- ・語彙理解力が相当年齢で示される
- ・言語性能力や知能との関連が強い
- ・学力との関連があり、とくに文章読解、作文、文章題との関連が強い

●PVT-Rの適用対象となる子ども

- ・指示や話の通りにくい子ども
- ・言葉での表現が苦手な子ども
- ・文章読解や作文、文章題の理解が苦手な子ども
- ・落ち着きのない子ども
- ・言葉の理解力を知りたい子ども
- ・おおよその知能の発達レベルを知りたい子ども

●実施までの手筈の整え方

- ・保護者と本人の承諾を得る際のポイント
- ・検査者と実施場所を決める際のポイント
- ・検査日時を決める際のポイント

●検査の実施

- ・検査者と子どもとの関係の持ち方
- ・実施・採点の行い方
- ・検査中の集中力・意欲を高める働きかけ方
- ・行動観察記録の残し方
- ・検査の終わらせ方

●結果の解釈

- ・解釈のポイント(語彙理解力、正誤パターン)

- ・解釈の裏付けを普段の様子からとる
- ・他の人の意見を聴く
- ・検査結果と適度な距離をとる

●解釈から支援へ

- ・支援の手立てに結びつく提案をする
- ・担任、保護者へのフィードバックの仕方
- ・支援と詳細なアセスメントへ向けて

(3) 総合考察

PVT-Rは、回答方法が簡便で、短時間で済むため、話すことやじっとしていることが苦手な子どもでも、心理的負担が少なくすむだろう。また、場所や時間もとらないため、授業に支障をきたさずに実施できる。しかも、WISC-IIIほど実施や解釈が複雑ではないので、特別支援教育コーディネーターが研修を積

めばPVT-Rの実施に当たることもできるだろう。測定内容は限られているが、その限界を理解したうえで活用すれば、子ども理解が深まり、当面の支援の目標や支援方法を考える際に十分役立つと思われる。これらのことから、PVT-Rは小学校に在籍する発達障害のある子どもやその担任等のニーズに適しており、学校での初期アセスメントとして有用だと結論づけることができる。

ただし、検査で測定できることなどを熟知し、担任や保護者に結果を分かりやすくフィードバックし、子どもの特性と子どもを取り巻く環境に適した支援を提案するという力量を検査者が十分に備えておく必要がある。解釈や説明の仕方については検査に熟練した人や専門家のサポートを利用するとよいであろう。すべての心理検査に当てはまることであるが、観察力、説明力、提案力を高めるには、子どもの発達や障害、様々な支援技法や理論に関する知識と臨床経験が不可欠である。検査者の力量を高めることで、PVT-Rはさらに発達障害やその周辺にいる子どもたちへの理解を深め、適切な支援を講じる上で役割を果たしてくれるものになるであろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計1件）

名越斉子 「PVT-R を用いた効果的な学校コンサルテーションに関する一考察」．埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要，第8号，169-179，2009. 査読なし.

〔学会発表〕（計8件）

①名越斉子 「PVT-R を用いたコンサルテーション—PVT-R 活用の利点と限界および留意事項—」．日本LD学会第17回大会，2008年11月22日，広島大学.

②名越斉子 「発達障害児へのPVT-R 絵画語い発達検査の適用—WISC-IIIとの関連及び初期アセスメントとしての活用—」．日本教育心理学会第50回総会．2008年10月11日，東京学芸大学.

③名越斉子 「PVT-R 絵画語い発達検査に見られる発達障害児の特性」．日本特殊教育学会第46回大会，2008年9月20日，米子コンベンションセンター.

〔その他〕

名越斉子 「平成19～20年度科学研究費補助金(若手研究B)研究成果報告書 小学校における初期アセスメントとしてのPVT-R 絵画語い発達検査の活用—発達障害児の理解語彙の特性を踏まえて—」2009年3月，58ページ.

6. 研究組織

(1) 研究代表者
名越 斉子 (NAGOSHI NAOKO)
埼玉大学・教育学部・准教授
研究者番号：30436331

(2) 研究分担者
なし

(3) 連携研究者
なし

(4) 研究協力者(50音順)
安住ゆう子 (AZUMI YUKO)
LD発達相談センターかながわ・センター長
宇佐美慧 (USAMI SATOSHI)
東京大学大学院教育学研究科・大学院生
内田晴美 (UCHIDA HRUMI)
春日部市立牛島小学校教諭
大美賀了 (OMIKA RYO)
埼玉大学教育学部附属特別支援学校・教諭
岡田智 (OKADA SATOSHI)
ながやまメンタルクリニック・臨床心理士
海津亜希子 (KAIZU AKIKO)
国立特別支援総合研究所発達障害教育情報センター・主任研究員
神田聡 (KANDA SATOSHI)
東京YMCA 東陽町センターASCAクラス・講師
菊池けい子 (KIKUCHI KEIKO)
旭出学園教育研究所・研究員
木村雅昭 (KIMURA NORIAKI)
桶川市立桶川小学校・教諭
小貫悟 (KONUKI SATORU)
明星大学・准教授
小林アエ子 (KOBAYASHI AEKO)
さいたま市立芝原小学校・教諭
樋口普美子 (HIGUCHI FUMIKO)
和光市立第五小学校・教諭
本田夏代 (HONDA NATSUYO)
和光市立第五小学校・教諭